
命日

菜乃香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

命日

【Nコード】

N1298B

【作者名】

菜乃香

【あらすじ】

中学3年生の藤本明日香^{ふじもとあすか}は生まれつき世話のやける子であった。自分が死んだ時、悲しませる人を1人でも減らそう。と考える明日香だったが、ある日転入生の安藤命奈実^{あんどうめなみ}と出会い考えが変わり始める。命奈実もまた、ほかの子とは違った変わった力の持ち主だった。2人の、毎日を精一杯生きようとした感動物語となっています・・・。

不思議な少女

この物語は私にとって 苦しくて 怖くて 悲しい

・・・とても辛い・・・

夢のようで現実的 現実的のようで夢のようなモノを書いた物語です・・・。

キーン コーン カーン コーン・・・

キーン コーン カーン コーン・・・

「明日香！昼いつしよに食べようよ！」

いつものように、クラスメイトの若菜が声をかけてきた。

若菜は私の友達。苦しいときにはいつもいつしよにいてくれる、

とても優しく、頼りになる子だった。

それでも私はそんな彼女のことを 親友 とは思わなかった。い

や、思えなかった・・・。

その理由は私にあった。

私は1人ではろくに何も出来ない・・・

生まれつき世話のやける子であった。

不思議な少女（後書き）

私の初作品となりました 命日。

どうぞここまで読んでくれた読者さん、

ぜひ最後まで読んで下さい！

感動をプレゼントしますッ！

私がんばりますので、どうぞヨロシクです

感想や質問を書いてもらえれば、

返事も書きたいと思ってます。

もし、作品を出している人なら読ませて

もらいたいです！！！！

不思議な少女・・・2

お母さんが24歳のときに、私は生まれた。

お父さんとお母さんは、私が生まれると知ってすごく喜んでたとおばあちゃんから聞いていた。

・・・が、生まれてきたのは私。

私でよかったのだろうか・・・？

お父さんは、私が生まれたという知らせを聞いて病院に来る途中に交通事故で命を落としているから、なお更そう思ってしまうのだ・・・。

私は だいけっかんてんい 大血管転移 という生まれつき心臓の病気だったのだ。

生まれたときは、普通の元気な赤ちゃんだったかのように思われた・・・。

何ともなかったのに・・・。どうして？ どうして私が？

私が生まれてから3日後、病院のみんなが寝に入ったときのことだ。

たまたま診まわりに来た看護婦の人が、303号室で真っ青になっている私を見つけて、すぐさま保育器の中に入れたのだという。手際よく看護をしてくれたため私は助かった。

その看護婦の女の人には25歳という若さで私を救ったのだ。いや、救ってしまったのだ。

おかげで今の私は毎日のようにその看護婦のことを思っていた。はつきり言って私はその看護婦が憎かった。

憎くて 憎くてたまらなかった。

その看護婦の人は、出世をして今頃は裕福な暮らしをしているのであろう。

自分のために他人を巻き込んでおいて。

あのとき死なせてくれればよかったのに・・・。

不思議な少女・・・3

「・・・明日香、どうしたの？ 顔が引きつってるよ？」

「ああ、ごめんごめん！ ちょっと魚の骨がつつかかった！」

「ええっ？！ ほらご飯飲み込むとかさ・・・。」

・・・本当はつかえてなかったんだけどね、小骨・・・。

放課後。

ほとんど毎日が検査のために部活にも入れない私は、家の近くの公園のベンチに腰を掛けていた。

詳しく説明すると、毎日検査を行わなければいけないほどに・・・事態は悪化している。ということになるのだろっ・・・。

医者は私になにも言ってはくれないが、そんなことはもう大体わかってる。

だから私もしつこくは聞かなかった。

それでも最後の最後まで学校に通いたかった私は、毎日通院の道を選んだ。

若菜にもこれ以上心配かけたくないしね。

木が太陽の光をちょうどよくしてくれている。

ここの公園のベンチはいつも静かでお気に入りの場所だった。

気持ちが悪く落ち着く場所でもあった。

・・・でも、今日の公園には人影があった。

砂場のほうで、男の子と女の子が遊んでいる。・・・兄弟だろうか？

転んだ女の子のことを、男の子がなぐさめている。・・・まるで私と若菜のようだ。

私達は兄弟ではないが、その光景はそっくりだった。

「・・・兄弟かあ・・・。」

お母さんは、私が 大血管転移 だと聞いて、きつとものすごく
ショックだったのだろう。

『お母さん、明日香にはお兄ちゃんとか妹とかいないのぉ？』
と 小さい時によく聞いたが、

『私には明日香が必要な。明日香が元気に生きてくれれば、も
う何もいらないのよ？ そうでしょ？』
としか言わなかった。

そう言われると何も言い返せなかったが、今思えば また明日香
みたいな子が生まれてくるかも知れないから・・・

たぶんそう思っていたのかも知れない。
でも、お母さんは 普通じゃない私を一生懸命に育ててくれたん
だ。 たった1人で。

あゝあゝ、私って結局、自分の大好きな人のそばに最後までい
てあげられないのかもしれない。
私のほうが先にお父さんを追いかけて行くような終わりになるの
かも知れない・・・。

近々そう感じていた。

そのためにも、お母さんを守ってくれる・・・妹や弟が居て欲し
かった。

私がいなくなったときのお母さんの顔を思うと、泣きそうになる。
悲しませる人を1人でも減らしておきたいために、私は親友をつ
くらなかった。

恋人なんて論外だった・・・。

どうせ悲しませるだけだから・・・。

不思議な少女・・・3（後書き）

読書さんを疲れさせないように、1部ずつを短くしてるので、サ
ブタイトルが同じのが続いています・・・汗

どうですか？ 読みにくいですかね？

いよいよ次の回では、もう1人の 変わった少女が登場です。
夢のように現実の世界をご覧ください。

出来るだけ1日1部を目安にして書いていきます！

不思議な少女・・・4

ガサツ ガサツ ガサツ ガサツ・・・。

後ろで人の歩く音がした。

この公園にはどんなに小さな音でも響いてしまう。

でもここでこの音を聞くのは、初めてだ。

その足音は、私のずっと後ろでとまる。

気になって振り向いてみると、そこには肩の下あたりまで髪を伸ばした可愛い女の子が立っていた。

見た目は幼く、とてもおとなしそうに見える。

顔は・・・はつきりと見えないが、たぶん私と同じ年くらいだろう。

手には、今にも枯れそうな黄パンジーの花を持っている。

それだけは、しっかり確認することが出来た。

その子は、公園の花壇をじっと見ていてだけで動かなかった。

（変わった子だな・・・？）

家、学校、病院の行き来をしている毎日の繰り返しだった私は、林間学校や修学旅行もろくに行ったためしなかった。

だから、普通の人にはつまらないことでも密かに興味を持っていた。

私は気づかれないように、空を見るフリをしながらその子を見ていた。

（枯れそうな黄パンジーの花をどうするんだろう・・・？）

どれくらい時間がたっただろうか。

あの子が要約体を動かした。

動かしたかと思ったら、花壇のほうを向いてしゃがみ、また動か

なくなってしまった。

こっちから見えるのはあの子の背中だけで、何をしているのかまったくわからない。

どうしても見たくなって、無意識に頭を左右に動かしていた。

しばらく見てると、あの子は ハッと我に返るようになつちを振り向いた。

そして、こっちに向かって歩いてくる。

私はその子が立ち上がった場所を覗き込んでビククリしてしまった。

そこには 周りのどの花にも負けないくらいの、堂々と綺麗に咲いている黄パンジーがあったからだ・・・。

不思議な少女・・・5

その子は私の前に立って、そつと言った。

「今の・・・見たの・・・？」

小さく言ったつもりらしいが、この公園では響いたかのように感じられた。

今度は私のとなりにそつと座った。

「え・・・、う、うん。あなたがやったの？」

私は半信半疑に小さい声で聞いた。でも声はやつぱり・・・響く。

「私ね、・・・命日が見えるの。」

「め、命日？・・・が見える？ どうして？」

質問とまったく別の答えが返ってきたのに、また違う質問をぶつけてしまう。

「・・・ううん！ ごめんなさい！ 何でもないの！！！ それじゃあ、私は帰るね！ 今日のことは内緒だよ！」

その子は、一瞬何かをためらったようだったが、笑顔で言った。

それともう1つ、ベンチを立った時その子は不思議なことを言い残していった。

「あそこの黄パンジー、3ヶ月後が命日だから！」

・・・意味がわからなかった。

名前も顔も知らない、初めて会った人に

『命日が見えるの。』

とか、

『3ヶ月後が命日だから！』

とか・・・そんなことがわかるの？

もし本当にわかるのなら、私の命日もあの子には見えていたのだろうか？

・・・すごく気になる。

でも、あの子の言っている事は本当なのかもしれない。
なんでって・・・。

ぴったり3ヶ月後に、あの黄パンジーが枯れたからだよ・・・。

約束

あの黄パンジーが枯れた次の日のことだった。

（痛い……。痛い……。痛いよおお……。）

誰かにおもいきりにぎられているみたいだった。

ここ最近、私の心臓はズキズキと痛んだ。

（心臓病の子にはこれが当たり前なんだ……。）
と、半分開き直りながらも、自分の席でうずくまっていた。

いつもなら、こういうときには若菜が近寄ってきて、気持ちを落ち着かせてくれる。

でも今日はそうじゃなかった。

朝 学校に着いたときに、若菜は

『明日香、聞いて！ 初めて彼氏が出来たの！ 告白されたの！』
と、嬉しそうに言ってきた。

（若菜には彼氏が出来たんだ……。）
正直ショックだった。

若菜は元気で、明るくて、優しい。

とても喜ばしいことなのに、どうして喜べないのか。

素直じゃない自分に腹がたった。

考えていると余計に心臓が痛くなった。

でもやっぱりこれでいいんだ・・・。

若菜には大切な人が増えたんだから・・・。

だからこれでいいんだ・・・。

今はこうやって自分自身に言い聞かせることが、1番の治療法なんだと思うしかなかった。

約束（後書き）

やっと次のサブタイトルに入ることが出来ました！

ここまで読んでくれた読者さんのおかげだと思ってますッ！

どうぞ最後の最後まで読んでください！！！！

約束・・・2

ガラガラガラ——ピシャン。

先生が入ってきた。

でも、それどころではない。

（心臓が・・・痛い！）

「えー、それでは授業を始めようと思うんだが、その前に転入生を紹介しよう。」

周りがざわついた。

「安藤^{あんどう}命^{めい}奈美^{なみ}です。よろしく・・・。」

聞き覚えのある声に思わず顔をあげた。

そこにはあの子が立っていた。

公園にいたあの子・・・。

命日が見えると言った、不思議な力を持った・・・あの子が・・・。

命奈美 と書いて めなみ・・・。

変わった子だと思ったけど、名前まで変わっている。

その子は、教室中をゆっくりと見渡した。

きつとみんなの命日を見ているのだろう・・・。

直感だが、そうだと思う。いや、絶対そうだ。

そんなことを考えているうちに、その子・・・安藤さんと目が会った。

安藤さんは にこつ と笑いかけてきた。

とても柔らかな、暖かい笑顔だった。

・・・また安藤さんに命日を見られてしまった。

いつの間にか、自然と心臓の痛みは治まっていた。

「それじゃあ安藤は・・・そこが空いてるな。よし、そこにしよう。」

私の斜め前の席だった。

1日中安藤さんと話すことはなかったが、心臓に激しい痛みも起こらなかった。

約束・・・3

いつものように放課後は、公園のベンチに座った。
今日は誰も来ていないようだった。

ガサツ ガサツ ガサツ ガサツ

この足音は・・・安藤さんだろう。

今度は私の真後ろで止まった。

「あなた、明日香ちゃんっていうんだね。・・・よかったらいっしょに話さない？」

声が公園内に響く。

私は迷うことなくOKをした。

聞きたいこと、言いたいと・・・とにかくたくさんあったからだ。

「・・・あなたは何者なの？・・・なんで命日が見えるの？」
話を最初に切り出したのは私だった。

安藤さんは即答した。

「私？ 私は人間だよ！」

安藤さんは笑った。

でも、ふざけている という感じではなく、真面目に答えてくれている。

・・・少々天然らしい。

「命日はね、生まれつき見えたの・・・。たぶん遺伝だけだね。」

今度は、少しだけ悲しい顔をした。

私はそれを見逃さなかった。

生まれつき・・・か。

やっぱり安藤さんも嫌なのかな・・・生まれつきが。

「ごめんね、変なこと聞いちゃって・・・。でも、あの時の黄パ

ンジーはなんで？」

「あの枯れそうだった花のこと？」

安藤さんは一息ついてから話し出した。

「・・・私、自分の命日を他の生き物に分け与えることが出来るの。信じられる？ 無理だね。」

「し、信じるよ！ 実際にこの目で見たんだから！！！」

とっさだったので、怒鳴るように答えてしまった。

「アハハハ！ 明日香ちゃんって、ものすごい変わってる。」

「安藤さんも、十分変わってる！」

2人で笑っていた。

おとなしそうに見えた安藤さんは、とても元気で明るい子だった。私は、あんなに大きな声で話したのは久しぶりだった。

約束・・・4

めな が転入してきてから5日がたった。

私とめなは、部活に入ることなく、放課後はずっと2人で話していたから、どんどん親しくなっていた。

いつの間にか、私たちは「あだ名」で呼び合うようになっていた。めなは、人懐っこい子だ。

若菜ともすぐになじんだ。

3人で一緒にいることも少くない。

でも私は、心の奥で 親友はつくらない ということが引っかかっていた。

・・・相談・・・してみようかな・・・。

思い切ってめなに聞いてみることにした。
すると、めなはこう言ってきた。

「ねえ、あーちゃん？ あーちゃんはお母さんに、なんで明日香って名前を付けてくれたのか聞いたことある？」

名前？

そこで名前の話が出てくるのは以外だった。

「そういえば小学2年生のとき・・・。」

『明日香？ お母さんはねー、明日香が毎日を元気に過ごしてほしい。明日を生きてほしいから、明日香って名前を付けたの。毎日元気に生きて、お父さんを喜ばせてあげないとねー。もし、明日香の病気のことでいじめる子がいたら、お母さんが助けてあげるからねー・・・。』

「・・・みたいなことがあったような？」

そしたら、めなは私の手を取って明るく言った。

「だったらその通りに生きなきゃ！ 毎日を大切に・・・がんばって、お母さんもお父さんも喜ばしてあげなきゃ！ あーちゃん、2人のこと大好きなんですよ？ 少なくとも私と若菜ちゃんは、あーちゃんの親友のつもりだよ？ 私も協力するから、一緒にがんばるって約束して？」

私は目が覚めたような気持ちになった。

今まで何をやっていたんだろう。

毎日毎日同じことが過ぎていくのをただ待つだけ。・・・そんなんじゃないよ！

私が死んだら・・・なんて考えている場合じゃない！

それまで何をするか・・・お母さんにしてあげられることを考えなきゃ！

めな・・・なんて現実的なことを言う子なんだろう・・・。

私は1人じゃないんだ！

お母さんがいる・・・家族がいる。

若菜とめながいる・・・親友がいる。

これからのこの時間を大切にしなきゃ！

「めな、ありがとう！ これからは、悲しませないようにするんじゃないくて、悲しんでもらえるようにがんばるよ！」

「うん、一緒にがんばろっか！ 約束だよ！」

こうして、私の人生は変わり始めた・・・。

入院

まず私は、めなと一緒に映画館に言ってみた。

・・・映画館で映画を見るなんて、初めてだ。

大きな画面に映った映像は、迫力満点だった。

「楽しかったねゝめな！」

「うん！ また見に来ようね！」

その後、ゲームセンターに寄ってプリクラを撮ることにした。

中でも、2人で肩を組んで中心に大きく「仲良し」と書いてあるプリクラがお気に入りだった。

私はそのプリクラを財布の中にしまっておくことにした。

こんな感じの休日。

平日は公園のベンチで楽しくおしゃべり。

休日は映画を見に行ったり、デパートに行って買い物をしたり・・・。

私の毎日は、1日1日がすごく楽しくなっていた。

普通の子がこんなに楽しい毎日を過ごしていたなんて、知らうともしなかった。

めなに会えてよかった・・・。

入院（後書き）

1週間近くもあけてしまいました・・・すみませんッッ!!

今テスト週間なので、間があくことが多いと思いますが、ご了承下さい。

あつ、でも1週間以内には書きたいと思いますのでよろしく願いますね!!!!

入院・・・2

もうすぐ夏休みに入ろうとしていたとき、私はめなに言った。

「ねえ、めな！ 夏休みに入ったら、遊園地に行こうよ！！」

すると、めなはオドオドしながら私の名前を呼んだ。

「・・・あーちゃん・・・？」

一瞬めなが何を言いたいのかわからなくなった私は、めなの言葉をさえぎり言った。

「どうしたの、めな？ 平気だよ。めなが絶叫系乗りたいなら、若菜も連れて行けば乗れるじゃん・・・！ ね、行こうよ。」

私は心臓病だから、絶叫系には乗れない。

「・・・あーちゃん、されはちよつとやめとこう？」

予想外の返事に内心びつくりしてた。

「なんで？ いいじゃん！ 体のことなら大丈夫・・・。」

「やっぱやめよう？！あーちゃんのお母さんも、さすがに心配すると思うし、危ないしさ！・・・ほら、次は私とじゃなくて、お母さんと買い物とかもいいと思うよ！」

その時の私には、何がなんだかわからなかった。

どうしてもめなはそんなに反対するのか・・・。

いつもなら、

『いいねいいね！ 楽しみ♪』

とか言ってくれてたのに・・・。

私だってこんなに元気なのに・・・！

それに最近めなの様子がおかしい。

顔色といたらこここのところ真っ青だし、落ち着きがないし・・・。

私、ふりまわしすぎちゃったかな？

少し休ませてあげよう。

「うん、わかった。めなは休んでね？」

「あ、ありがとう・・・。」

次の日、めなは学校を休んだ。

入院・・・3

どうしちゃったんだろう・・・。

あの後熱でも出しちゃったのだろうか？

私は、今日初めてめなのことを本気で心配した。

それはちよつとひどい。

と思う人もいると思うが、それはしょうがないことだ。

私は人付き合いに慣れていないんだから。

気になった私は、クラスの担任の先生に聞いてみることにした。

「先生。安藤さんどうしたんですか？」

「ああ、なんだ藤本も聞いてないのか？」

先生は困った顔をして、さらに続けた。

「実はな、生徒手帳にも『今日は休みます。』としか書いてなかったんだよ。しかも、教卓の上に置いてあったんだが、誰が持ってきてくれたのかもわかってないんだ。私はてっきり藤本が持ってきてくれたんだと思っていたんだが・・・？ 参ったな。」

「そうですか・・・。」

・・・何かおかしい。

めなだつたら、生徒手帳は私に預けると思っのに・・・。

「それで、今から安藤の自宅に連絡してくるから、帰りに生徒手帳を届けてくれるか？」

「あ、はい。わかりました。」

・・・その時だった。

心臓に今まで以上の激痛がはしつたのだ。

とたんに目の前がまっくらになった。

先生の叫ぶ声だけが聞こえる。

「どうした？・・・おい、藤本！
車を・・・」
藤本！！！！
だ、誰か救急

入院・・・4

・・・ピッ　ピッ　ピッ　・・・

そつと目を開いてびっくりしてしまった。

私は今、病室の中にいる。

すぐにそうわかった。

お腹の少し上辺りがズキズキと痛い。

そばには、若い看護婦さんと、若菜が立っている。

「明日香？・・・明日香！　よかった・・・！！！」

見ると、お母さんが手を握っている。

「お母さん・・・。私、どうだったの？」

「明日香、最近痛みはあった？」

「あったけど、そんなの結構前で・・・。」

「どうしてそれを言わなかったの！！！」

お母さんの声が病室に響いた。

「で、でも最近は全然そんなのなかったの！」

それは嘘のようで、本当のことだった。

めなとあの日話してから、痛みなんてこれっぽっちもなかった。

お母さんが黙る。

若菜が言った。

「おばさん。明日香の言っていることは、本当だと思います。ここ最近元気な明日香しか見たことがありません。たぶん、クラスのみんなもそう思っていたはずですよ。」

「ありがとうね。若菜ちゃん。」

クラスのみんな・・・・・・・・そうだ、めなは・・・・？

入院・・・5

お母さんは、私に抱きついて言った。

「明日香・・・お願いだから無理しないでちょうだい・・・お母さんには明日香しかないんだから・・・。」

その言葉を聞いて、目に涙がたまった。

お腹の上辺りが妙に痛いのは、手術をした後だろうと思った。

生まれて4日後のときにやった手術と同じなら、長い線の傷跡が新しく残っているはずだ。

この傷には、小さいころからコンプレックスを感じていた。

(傷・・・長くなっちゃったなあ・・・)

そう思っていると、そばに立っていた看護婦さんが話しかけてきた。

「こんにちは、明日香ちゃん。今日からあなたのお世話をする事になった、鈴木利緒です。よろしくね。」

「よろしく……お願いします……。」

利緒さんは、とても綺麗な人だった。30歳前後くらいだろうか？半分見とれていた。

「それと、明日香ちゃんにお友達が会いに来てくれるわよ？ さつきから入ってこようとしなんだけど……。命奈実ちゃんだったかしら？ どうぞ。」

「も。う。つ。ど。」

めなが入ってきた。

代わりに、お母さんと利緒さんは出て行ってしまった。

若菜も気をきかしたのか、出て行ってしまった。

めなの顔色はもとに戻っている。

[illegible]

L

● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ○

L

長い沈黙があつた。

別に話したくない訳ではないが、なんて言い出せばいいのかわからなかったからだ。

先に口を開いたのは、めなだった。

「具合は・・・だ、大丈夫？ あーちゃん。」

声はかすかに震えていた。

「うん、大丈夫。ありがとう。それより、めなこそどうしちゃったの？ 学校休んで・・・。」

そこまで言って私は考えた。

めなは下を見て震えている。

私にはなんとなく・・・その行動の意味がわかったような気がして、ぞつとなった。

なんだか怖くなってきた。

今、めなに聞かなきゃ・・・。

本当の気持ち

今まで聞かなかったこと・・・いや、聞けなかったことを・・・聞かないや・・・。

聞いても、本当のことを言ってくれるかわからないけど。

「めな・・・私ね、自分の命日が知りたいの。めなには、私の命日が見えるんだよね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

めなは、まだうつむいている。

「めな、顔あげて？」

めなは、言われるとゆつくりだが、素直に顔をあげた。

「私の命日・・・・・・・・見えた？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

やっぱり黙っている。

「いつ何が起こるのかもわかるの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「もしかして・・・私が倒れるって知ってて学校休んだの？ 違うよね？」

「ごっ、ごめんなさいつい・・・でも——」

私は頭の中が真っ白になった。

『あーちゃん！ お母さんも心配するし、そんな遠くって・・・ほら、危ないし。次は私とじゃなくて、お母さんと買い物とかもいと思う！』・・・。

前にめなが言っていた言葉がよぎると同時に、涙が流れ出てきた。あの言葉には、本当はどんな意味が含まれてたの・・・？！

「・・・・私はあーちゃんを——」

めなは話を続けていたが、私には聞こえていなかった。

「・・・うるさい！ 聞きたくない！ なんなの？ 名前がどうのここの言ってやる気にさせておいて！ どうせ、すぐ死ぬんじゃない！」

めなは部屋のドアまで後ろ向きによろけた。

それでも私の口は止まらない。

「めなのバカ！！ 出てってよぉ・・・。」

「違う・・・違うのぁーちゃ——」

「出てけ！！！」

めなは、よろけながらも走って出て行った。

本当の気持ち・・・2

めなが部屋を出て行って、すぐにベットに倒れこんだ。

・・・涙が止まらなかった。

前まで『早く死ねばいいのに』とか思っていたなんて嘘みたいに、私は死にたくなっていた。

・・・むしろ死にたくない。

体はあまりもちそうにないくらい、力がぬけてだるかった。

『毎日を大切に・・・頑張つて、お母さんもお父さんも喜ばせてあげなきゃ！ あーちゃん、お母さんのこと大好きなんでしょう？ 私も協力するから、頑張ろうよ！』

・・・

また、めなが言っていた言葉が頭の中をよぎった。
わかつてる。

わかつてるよおお・・・。

めな、私を気づかってくれてたんでしょ？

私はね、めなが・・・めなが大好きだから・・・。

ずっと一緒にいたいから・・・。

なのにあんなこと言って・・・私ってバカだよね・・・。

薄々気付いてたよ・・・。

自分の体がもうもたないってことくらい・・・。

ただ、めなと一緒にいれる時間が残りわずかになっていくって・・・
そっちのほうが嫌だった。

「・・・ごめんね、めな。・・・ありがとう、めな。」

気がつくと思っていた言葉を声に出していた。

本当は、めなに直接言っておきたかった。

・・・・・・・・・・。

時計を見ると、もう10分は経っていた。

そこに利緒さんが入ってきた。

「あら〜どうしたの？　ちゃんと寝てないと駄目よ。」

「あの・・・利緒さん。ちょっと聞いてもいいですか？　もし・・・

・あの、本当にもしですから。人の命日が見えたら・・・利緒さんならどうしますか？」

「命日？　う〜ん・・・どうするかは実際になつてみないとわからないけど、1つだけ。大切な人の命日が見えたら、その人が早く天国に行くにしても、長生きするにしても、ちょっとつらいなあ。」

「つらい？」

「どうしてつらいの？」

「人のことなのに・・・。」

「すいません。変なこと聞いて・・・ありがとうございました。」

「めなは、私の命日が見えてつらかったのだろうか？」

「私、めなには自分の気持ちをおしつけといて、めなの気持ちには全然気付いてあげられなかったのかもしれない・・・。」

「私は、めなに対して申し訳ない気持ちでいっぱいになった。」

ピピピピッ　ピピピピッ　ピピピピッ・・・

「明日香ちゃん？」

「・・・明日香、明日香！」

「ごめんなさい・・・許して、あーちゃん・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

•
•
•
○

本当の気持ち・・・2（後書き）

事態は急変？！

この続き気になりますか？　　すみません。私、じらし上手なんです。

（σ^皿^）

さて、完結まで残りわずかとなりました。最後までヨロシクお願いします。

事実

チュン・・・チュン・・・チュンチュン・・・

鳥のさえずる音が聞こえ、目が覚めた。

病院に入院して、ちょうど1週間になる。

いつもと変わらない朝である。・・・と思ったら、今日は違った。なんだか、体の具合がよくなった・・・ような気がする。

スツキリとした開放感ある感じ・・・わかってもらえないかもしれないが。

なぜか、横に利緒さんが座っている。

「おはよう。目、覚めたのね・・・。よかったわ・・・。」

(????)

「おはようございます。こんな朝早くにどうかしたんですか?」

「実は、明日香ちゃんにいいお知らせがあるの。出来るだけ早く知らせたいなあと思って。」

(いいお知らせ?)

「明日香ちゃん・・・今日で退院よ！ おめでとつ。もうすぐお母さんが来ると思うから・・・。」

「・・・た、退院？ ですか?!」

もう2度と退院なんて出来ないと思っていたのに！

嬉しい！

家に帰って、自分のベットで寝られる！

お母さんの手料理が食べられる！

学校に行ける！

それに・・・めなに謝りたい。

また、若菜とめなと楽しく話したい！

ところが、嬉しそうな顔をしている私を見つめて、利緒さんは悲しそうに言った。

「それともう1つ。悲しいお知らせがあるんだけど、落ち着いて聞いてもらえる？」

「えっ？」

（悲しいお知らせって何………？）

想像もつかなかった私は、次の利緒さんの言葉を聞いて絶句した。

「昨日の昼間、命奈美ちゃんがね………なくなったの……。この病室で。」

事実・・・2

・・・えっ？・・・えっ？ えっっ？？

何？ なんで？？

意味がわかんないよ！

なんで、めなが死ぬの？！

「ど、どうして・・・？ どうしてめなが死ぬの？
教えて・・・教えてよ、利緒さん！ 早く！」

私は、利緒さんを急き立てた。

「・・・そうね。やっぱり話さないといけないわよね・・・」
利緒さんは大きく息を吸い込み言った。

「明日香ちゃん。あなた、昨日の昼、死にそうだったのよ。真っ
青な顔してね・・・」

「私が・・・死にそうだった・・・ですか？」

「そうよ。そこに、あなたの命日を知っていた命奈美ちゃんが来て
しまったらしいの・・・。私が来たときにはもう遅かった・・・
。命奈美ちゃんは、とっさの判断で、あなたに自分の命日を全部あ
げてしまったのね・・・。明日香ちゃんの名前を一生懸命呼びなが
らね・・・。」

「そ、そ・・・んな。めなが、私に命日を・・・全部・・・。」
もう声にならなかつた。

シヨックと悲しみで頭の中が、いっぱいいっぱいだった。

『許して、あーちゃん！』
・・・。。。。。。

そうか。

あのときに聞こえた声は、めなの声だったんだね・・・。
でも、なんで利緒さんはめなの力のことを知っているの
だろう？

事実・・・2（後書き）

いままで、明日香達の年齢をはっきり書いてなかったと思います
が、14 or 15歳の中学3年生です。

なんか、ごちゃごちゃしてて申し訳ないです！

あと残り10部弱になりました。

最後まで頑張りますッ

事実・・・3

「なんで、めなが……。私、最後の最後にめなに言った言葉が『出てけ！』って……。なんで……。なんでよめな——。」

私の目から涙があふれ出てきた。

その姿は、とても中学3年生に見えないだろう。

ただただめなを思っただけ泣いた。

そして途中で考えた。

「利緒さん。めなの両親はどうしてるんですか？」

「それがね、命奈美ちゃんの両親そろってこの世には……。」

……。うそっ！

めなは、あんなに明るいい子だったのに、お父さんもお母さんもうなかったなんて！

そういえば、会ったことない。

「命奈美ちゃんの名前はね？ お母さんが付けてくれた名前なんですよ……。『たくさん生き物たちに、あなたの優しさを配ってあげなさい……。振りまいてあげなさい。あなたなら、たくさん命と優しさを実らせてくれることでしょうね……。』って。」

めなにそんなことがあったなんて……。

『ありがとう、めな！ 私これからは悲しませないようにするんじゃないくて、悲しんでもらえるような子になりたい！ 努力するよ！ 努力するよ！ 約束する！』

『うん！ 一緒にがんばろうか！』

何気なくしためなどの会話・・・。

この1文には、どんな気持ちが込められていたのか・・・。

「命奈美ちゃん、あなたに出会ったとき、『この子に決めた。この子に生きるって楽しいっていうことを教えてあげなきゃ!』って、純粹にそう思ったんじゃないかな?」

そうだったんだ・・・。

めな、そんなこと思ってたの?

・・・?

おかしいよ。

そつきから、なんで私の知らないこと、利緒さんが知ってるの?

事実・・・4

なんで、私が知らないことを利緒さんが知ってるの？

そんな顔をして利緒さんを見つめていると、利緒さんはそのことにも答えてくれた。

「実は、明日香ちゃんに命日のことを質問される前にね、明日香ちゃんの病室から泣いて出てくる命奈美ちゃんにでくわしたの。そのときに、話を聞いてあげてたの。明日香ちゃんの命日がどんどん近づいてくるものだから、落ち着かなかったのね・・・。」

「・・・・・・・・。」

「明日香ちゃんは気付いてたかわからなかったかもしれないけど、命奈美ちゃんね、毎日お見舞いに来てくれたのよ？ 明日香ちゃんに名前のこと話しちゃったっていつて、『私も名前大切にしなきゃ』って言うってたわよ？」

「めな・・・・・・・・。」

「昨日だって、明日香ちゃんのことた助けたいと思って、駆けつけてくれたんだね・・・きつと。」

私は話を聞きながら涙が止まらなかった。

めなに逢えて人生変わった・・・。

めながいなかったら、私は今どうなっていたんだろう・・・。

・・・1人むなしく、孤独に・・・死んでいたろう・・・。

私の本当の命日は過ぎたのだ。

めなが変えたのだ・・・。

わからずやの私で本当にごめんね・・・。

ごめんなさい・・・めな。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

利緒さんが口を開いた。

「・・・・・・・・１つだけ、命奈美ちゃんに会える方法があるの。」

「方法って・・・・・・・・どうするんですか？」

「私の命日を命奈美ちゃんにあげるの。」

はっ？ 利緒さん何言って・・・・。

事実・・・5

「私の命日、明日なの。それを命奈美ちゃんにあげれば、明日までまた一緒にいれるでしょ？」

「・・・?!」

私は口をポカンとあけて呆然としていた。

「明日香ちゃん。今まで内緒にしててごめんなさいね。私、命奈美ちゃんと同じ力があるの。」

利緒さんの顔は本気だった。

「本当は、最後の最後に明日香ちゃんにあげようと思っていたんだけど、なんだか同じ人に2回つかえないらしいの。」

「同じ人って・・・？ 私、もらったことなんか・・・。」

「あるでしょ？」 生まれて3日後303号室”で。」

・・・!!!

最近考えることがなくなっていた、あの看護婦・・・

顔も声も記憶に残っているはずがなかったが、ずつつと憎んでいたあの看護婦・・・。

「まさか・・・。うそ？ 私をあのとき看護したのが・・・利緒さんだったなんて！」

「驚くのも無理ないわね・・・。本当にごめんなさい。」

「そんなんっ！ そしたら、利緒さんは40歳のはずです！」

「私は、40歳よっ。」

・・・???

ある日突然、利緒さんに2回も脅かされることになるなんて、予想していなかった。

でも、それならすべてのつじつまが合う。

「・・・な、なんで・・・？　なんであの時私を助けたの？！　・

・こうなるだけだったのに・・・！！」

私は涙ながらに訴えた。

事実・・・6

「・・・そんなこと言わないで、明日香ちゃん・・・明日香ちゃんの命日が私にはわかっていながらも、あの時はあせったわ。今回の命奈美ちゃんもそうだったと思う。これから先、あなたがどれだけ辛い思いをするのかということも、承知でやったわ・・・」

「なんで！ そんなことを・・・！」

「聞いて！ 明日香ちゃん！ 私、あの時は新人だったけど、患者さんには命日はあげないようにしようって決めてたの。尊い命だから。・・・でも明日香ちゃんのお母さんは、あなたの生まれた直後に死んだ旦那さんがいたのよ。悲しいはずなのに、笑顔でこう言ってたわ。『この子はお父さんの生まれ変わりだわ・・・きつと長生きしてくれる・・・』それなのに、明日香ちゃんの命日は4日後。この状況に誰が耐えられたことが・・・あなたのお母さんに喜んでほしかったの・・・この通り、あなたに恨まれることも承知済みよ？」

利緒さんは苦笑いした。

・・・何？

私、こんなに優しく心強い人に助けてもらっていたのに、『憎い』と思うことが出来なかったの？

最低最悪な人間・・・だね、私。

「明日香ちゃん、命日を全部あげるとどうなるか予測つくかな？」

「・・・病気が治る・・・んですね？」

「そう。私たちには命日は見えても、未来までは見えないわ。あとは明日香ちゃん次第よ？」

今度は心から笑ってくれた。

「利緒さん・・・私・・・今までずっと・・・利緒さんのこと、・・・身勝手な人だ・・・思ってた・・・本当は・・・優しい人・・・な・・・のに・・・私が身勝手でしたね・・・」

「もういいのよ。誤解が解けて嬉しい……。どうせ明日にはこの世にいないんだから、あなた達のためにつかいたいわ。さようなら……。明日を生きる子——明日香ちゃん……。」

それは、普通ではあり得ない別れの告げ方だった。

1人の人に会うために、もう1人の命を失わなければならない。

神様はいつでも 私に意地悪だった……。

再会 ・ 別れ

ありがとう……。

ありがとう……。

みんな、本当にありがとう……。

私、ずっと1人で孤独だと思ってた。

でも……小さい頃から、みんなは応援してくれていたんだね……。

めなに会ったら聞きたいこと、話したいことがたくさんある……。

そう、初めてめなに会ったときみたいに。

でも内容は……内容は違う。

私は今、興味や好奇心ではなく……心の底からめなに会いたい！
そして伝えるんだ。

『ありがとう……ごめんなさい……』

……めなに会ったら、2回目のお別れが待っている……。

カチャッ……。

私は目を疑った。

そこには、死んだはずの……めなが立っていた。

「あーちゃん……。」

めなの笑った顔、優しい声。

何日間も聞けなかったこの声……。

「めな……めな！めなー！」

何度もそう叫んで、めなに跳びつく。

「今日、退院なんだってね！ よかったね、あーちゃん！」
まるで、自分の命日がわかっていないかのようなこの口調。

ガチャッ。

今度はお母さんだった。

「あら命奈美ちゃん。こんにちはー。さあ明日香、服持ってきたから着替えなさい。今夜は退院祝いよ。」

めなは、私のお母さんの笑顔を見て微笑んでいた。

『あーちゃんを助けて本当によかった。』と言い出しそうな満足顔だ。

「・・・お母さん。今日、めなとうちに泊まっていいい？」

「まあ大歓迎よ！」

よかった・・・。

これで1日中めなと一緒にいることができるんだ・・・。

再会　・　別れ・・・2

夜、私達は寝ないでずっと話してしようということになった。
白いソファによりかかり、大きなタオルケットを2人でかけていた。

でも・・・何から話そうか・・・。

たくさんありすぎて・・・。

「めな、今までずっと迷惑ばかり掛けててごめんね・・・。」
最初に出てきた言葉はそれだった。

ああ、始めっから何言っちゃってるんだろう！

せっかくめながいるんだから、もっと楽しい話・・・楽しい話を・・・。

「何言ってるの、あーちゃん。私だって、お見舞い毎日行ってた
くせに　あーちゃんに顔会わせないでさー！　それじゃあお見舞い
じゃあないっつーの！　アハハ！」

めなは満面の笑みだった。

「そんなことない！　毎日毎日目を開けると私の真横に飾ってた花・・・。黄パンジーの花！　届けてくれていたんでしょ？」

私の病室には、毎朝新しい黄パンジーが咲いていたのだった。

「気付いてくれてたの？　嬉しい！」

めなと私はその後もずっとしゃべっていた。

初めて会ったとき・・・。

転入生のめなが入ってきたとき・・・。

いっしょに映画を見に行ったとき・・・。

ケンカをして、めなが病室から出て行ってしまったとき・・・。

楽しいことも、悲しいことも、私達にとってはみんないい思い出に変わっているんだよね・・・めな。

再会 ・ 別れ・・・3

夜中の2時をまわった。

私はふと思い出して、バックの中から財布を持ってきた。

そして、中からめなと撮ったプリクラを取り出した。

夏休みに入る少し前に撮った、あのプリクラだ。

「見て、めな。この頃の私達ってなんかすごく幸せそうだよね」

「！」

するとめなは、私の手を握り横目で見ながら言った。

「私は今が1番幸せ。」

「・・・そうだったね！」

私はこのとき改めて思った。

めな・・・行かないで・・・。

「ねえめな？・・・生まれつきって嫌？」

少しの間があり、

「へへ、嫌だな。」

と、返事が返ってくる。

「そっかあ。・・・私も生まれつきの病気って嫌だなって・・・
・・・？めな？」

めなの白くて柔らかな頬ほおに、月の光が反射して何かが光った。
そしてめなは言った。

「あーちゃん・・・。命日が見えるってことはね？辛いし、悲しいし・・・とつても”孤独”・・・なんだよ・・・。お父さんと、おかあさんが死んじゃって・・・それから、学校行く・・・ときも、決まって1人・・・だし、仲のいい子だって・・・命日が近いときもあつ・・・たのお。」

私は今、目の前で起きていることが信じられなかった。

「・・・でも・・・ね、あーちゃんに、会ったとき、”かたち”は違う・・・けど、おんなじ思いをしてる子がいるんっただな
って考えて・・・。だからあ、あーちゃんに『めな』って
呼んでもらえて・・・嬉しかったのお・・・。ヒック」

今まで涙なんて見せたことのなかっためな。

むしろ明るいきしか見せなかっためなが今・・・泣いてい
るんだ・・・。

私と同じように・・・ううん。私以上の苦しみを背負っていたの
かもしれない。

私はめなの赤くなった顔を肩で隠すようにして抱き寄せた。

「ありがとう・・・、ありがとう・・・、ありがとう・・・。め
な・・・。今泣いてくれてる人がいる。めなが泣いてくれてるって
ことが何よりも嬉しいよ・・・。めながくれた命日・・・絶対大切
にして、残りの人生を生きて行くから・・・。そしたら、めなのと
ころに行くから・・・。これが私達の最後の約束だからね・・・。」
「・・・う・・・ん。待ってるからね・・・。」

待って・・・めな・・・。

1人にしないで・・・めな・・・。

・・・行かないで・・・。
・・・。

再会 ・ 別れ・・・3（後書き）

いよいよ次回で最終回になりますッ！

・・・あれ、10部弱もなかったですね・・・汗

明日香より

「うん……！」

私は思いっきり伸びをした。

ソファに寄りかかったまま寝てしまったらしく、背中が痛かった。

「めな・・・？」

「めな・・・？」

めなの姿は……そこにはもうなかった。

行っちゃったのか？。

・ ・ ・ さよならって言えなかったな。

やっぱりなんだか悲しかった。

昨日までは隣にいためなが、妙に恋しい。

今朝はいつもより寒かった・・・。

[illegible]

私を愛してくれたみんなへ

お母さん、私を産んでここまで育ててくれてありがとう。

若菜、こんな私だったけど、おせわしてくれてありがとう。

利緒さん、あの時の命日……助けてくれてありがとう。

そして最後に・
・
・

めな、生きるという喜びを教えてください。ありがとうございます。

明日香より（後書き）

はあ、やっと終わりました！

ここまで読んでくれたみなさん！ 本当にありがとうございました！！！！

初作品で結構連載させちゃいましたねえ。（一話一話が短いんですけど・・・）

どうでしたか？ 感動してくれました？！
感想お願いしますッッ

次作は、たぶんホラーかSFになると思います！
近いうちに投稿していきたいと思いますので、ヨロシクお願いします！
それでは、さようなら♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1298b/>

命日

2010年12月10日18時08分発行